



開設二周年に当つて

史料室だより
第5号
1983.2.21

二周年記念号

編集 田辺 真人

発行 神戸・深江会館

生活文化史料室
深江財産区管理委員会長 太田垣 正雄

電話 神戸市東灘区深江本町3-5-17
電話 (078) 411-10475

深江財産区管理委員会長 太田垣 正雄

昭和五十五年春、私ども深江財産区では田辺眞人先生に編集を委嘱して、深江史誌刊行に着手しました。資料あつめのきなが、明治七年に建築され戦災を免がれた旧深山邸が改築されることになり、当主深山健二先生から旧邸内の古くからの所蔵品で史誌編集に役立つものがあれば縦て提供する旨の申し出がありました。

早速調査願いましたところ、数多くの古文書始め貴重な資料が発見されました。これらの散逸はまことに忍び難く、できれば資料館を設け一般に展示、編集に役立つものがあれば縦て提供する旨の申し出がありました。

参考者も週二日（土、日曜）の開館ですが既に一千四百人（開館日一日平均一五人）を数える現状でございまして、現在の設備では資料の格納・展示替等も意の如くならず、まことに狹隘な状態となつてまいりました。

折角寄せて頂きましたこれら貴重な資料を有益に利用しますためにも、また子供達への教育的利用をはかるためにも、出来得れば施設を拡張したいと思つております。地域文化の一層の向上のため、大方の皆様のご協力を得て増築計画を進めていく次第でございます。

深山健二先生が史誌編さんのために投ぜられた資料贈贈の一石の波紋は、年と共に地域の方々の協力を得て、その輪を広げ、多くの博物館・郷土館をはじめ海外の博物館とも協力関係を結び、友交を深めつつありますことは、まことに嬉しい耐えません。

私たちの史料館は、国や府県、市などによる広大な博物館とは違つて、どこまでも私達の祖先の遺し物の展示協力のお話がまとまりました。



魚屋道の記念碑

歩く会当日、昔あった道しるべに横して完成した石碑。



昭和57年10月10日

魚をかついで魚屋道を歩く会。かつい魚の準備をする納多春雄氏。

た生活文化財を中心、地域の特色ある生活文化史料館として育て、今後も運営して参る所存でございます。

一方、史誌の編さんも、近世史料集の稿本も分析研究を進めており、史料館増築完成を期に史料編一号を刊行、以後続刊の予定です。また、近・現代の生活史については、近く口碑採集に着手し、本年中に原稿を完成し、次年度発行の考えでございます。

どうか今後共、史料館に史誌編さん格別のご協力を下さりますようお願いいたします。

条里制研究からみた深江

神戸史学会代表 落合重信

明治一八年の陸地測量部の地図で、(第1図参照)

深江村あたりを見ていて、まず目につくのは、フォー
ーク状の高橋川であろう。東から伊勢野川・四ツ松川
(宮川)・串田川・横川・要玄寺川である。そのうち
横川が延々一〇町(約一キロ)も東西に流れている
ということは(現在は変っているが)、神戸地方と
しては尋常ではない。うしろに六甲山系を負い、そ
の岩石が花崗岩だから、風化した砂をどんどん流し、
しかも海が近いために、川はすべて直線的に南北に
流れ。だからこの川が東西に長く流れているとい
うことは、人為的な工作が施されていることを示し
ている。

それは、一町方格に区切つて開拓していった条里
制の耕地へ灌漑するために、耕地に添うように流路
を変えたものである。横川は、旧岡本梅林のあたり
から流れてくる背谷川・天上川の水を福井池・皿
池の二つの池あたりで受け、そこから条里耕地に
添つて、東へ約一キロの高橋川へ合流させたもので
ある。

この地方の条里制研究は、吉井良尚氏の「武庫郡
の条里(実は菟原郡の条里)」(『近畿古文書叢書』第十一輯
昭10・3)にはじまる。吉井氏は付図として詳細
な復原図を付けておられる(第1図)。吉井氏はそ
の復原図に「条」・「里」を記入しておられないが、打
出・西宮界の堀切川あたりを一条とし、それより西

へ十五条を数えて、西瀬・昔合界あたりで終る。里
は、山すそからはじまって海岸まで四里とする、も
のである。

それでは、その一町角に区切つて開拓してゆく条
里制開拓が施工されたのはいつのころであろう。だ
いたい条里制の開拓の時期は、中期古墳が盛んに築
造された五世紀から、班田授の廢絶する一〇世紀
ごろまでの間だとされている。この間にあって、地
方地方の状況によつて開拓の時期を定めてゆくわけ
だが、わたしは、その開拓時期を、菟原郡に存在す
る岡本ハボソ塚と二つのおとめ塚古墳との関係から
求めてみようとした。(拙著「条里制吉川弘文館」)

三つのおとめ塚というのは、東から、

(1) 鳥田の求女塚(東灘区住吉町鳥田)

(2) 東明の乙女塚(東灘区御影石町)

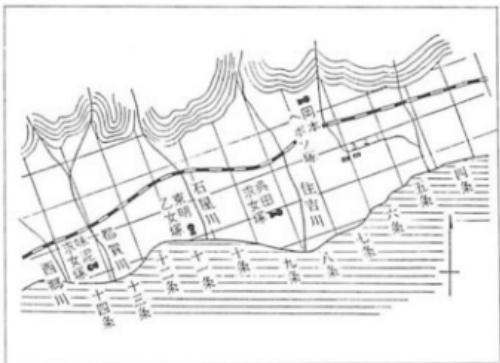
(3) 味泥の求女塚(灘区都通二丁目)

それぞれ一・五キロないし二キロの等間隔をもつて存

在し、いずれも山麓からはなれて、きわめて海岸に
接近して存在する(第2図)。これらの中期古墳が
築かれたところ——それは同時ではなく一世代一基と
考えるのであるが、山麓から海岸の間に横たわる十
キロあまりの長さの帶のような細長い平野はどうなつ
ていたのであろうか。まったく未開拓であつては、
次々それらの古墳が海岸に築かれてゆけるわけがない
とすれば、そのころすでに、代制度にしろ条里制
ればならない。そして代制度は私たちのいう長地形



第1図 菊池郡条里復原図(吉井良尚氏)



第2回 萩原郡条里における三つのおとめ塚とヘボン塚

があげられる。呉田の求女塚の出土品も全部が収められていないので全貌はわからないが、

環狀乳紋模樣帶神獸鏡，平樣式二神二獸鏡
（獸帶鏡）

鏡
六面（長宜子孫内行花文鏡、繪模樣帶四神四瑞）

錢、三角綠華紋帶四神四獸鏡、三角綠三神

出土品が大体似ているので、この古墳もヘボン古墳と同様、前期古墳に數えられたが、その後の小林行維氏の同範鏡の研究によると、この方は今まで考證されたよりかなり時代がくだるものとされるようになった。私たちはその立地条件から、中期にかかるものという見解をとる。

地割をもつ条里制にほかならない。現在もなお顯著にのこる菟原郡の条里制遺構がそれである。私たちはこの三つの古墳に、さらず岡本のヘボン塚（第2回図参照）を加えることによって、次のようなことを

岡本では「オノ塚古墳」は前原古墳として全国でも最も古い古墳の一つに数えられているが、出土品として現在知られているものは、盃形器を貰戻したものが、その全貌はも一つ明らかでないけれど、主要なものとして、

ヘボン塚→奥田……東明→味泥の関係はさらには、すんで、
ヘボン塚→奥田→東明→味泥の関係が推測され、東から順次西へ移つてゐる状態が明らかにされる。そしてさらにヘボン塚から奥田

神戸華僑歴史博物館 (館長 陳 德仁)

9時～17時（年中無休）

大人 300円 学生 200円 (10人以上団体割引有)

国鉄元町駅 西口から南へ5分の海岸通角

〒650 神戸市中央区海岸通3丁目東南角KCCビル2階
（078）221-1227

井上郷土玩具館

(館長 井上重義)

10時～17時 毎週水曜休館（祝日は開館・翌日休館）

姫路駅から⇒国鉄播但線で23分の香呂駅下車
車へ徒歩10分

〒697-21 兵庫県神崎郡香直町中仁野671-3
（070232）3-4289

入会のおすすめ 神戸史学会（代表 萩原重信）

機關誌「歷史」袖頁：（隔日刊）

金費：年額 2,000 田（1~12月分總納）

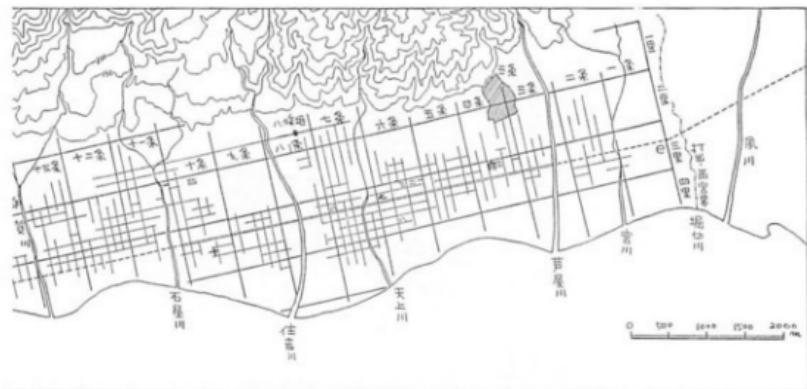
〒653 神戸市長田区川西通3丁目8 太陽印刷内
電 (078) 691-2085 振替口座 神戸4018

SUN-TV

©ザ・ワールド

〒650／神戸市中央区港島中町6丁目9番1
TEL(078)302-3333(代)

第3図 萩原郡条里制復原図（吉本昌弘氏原図）



求女塚に移る間に山麓から平野地帯の海岸寄りに移つてゐるのが見られる。この地方の最初の条里制開拓は、このヘボン塚造と翁田求女塚造の間に求められる。古墳の編年がもっと精密になり確かにれば、この地方の条里制開拓の時期はかなりなところまで確かめ得られるのであるまい。

吉井良尚氏によつておこなわれた復原図についてよく見ると、今まで誰も注意しなかつたけれど、一町角の条里復原方格線と道路との間に一致しない部分が見られる。

吉井氏の復原図は旧本山村小路一ノ坪二ノ坪同村北畠三ノ坪の並ぶあたりを基準としたとみて、六条十九条のあたりは方格線と道路が一致しているけれど、十条の石屋あたりから西においてはズレが目立ち、それから西へ行くにしたがつてズレは大きくなる。十四条に至つては、二十間あまりのズレをみせて、いるのだから大きい（第一図）。石屋川あたりで、条里の設計・施工方法・時期が變つているのではない。そういえば、復原の基準とされたかと思える六条から東へ行つても、まだそこにはズレが目につく。東から宮屋川・住吉川・石屋川あたりを中心におのれの開拓の時期が違うところから、このようなズレが生じたのではないか。それは、四つの古墳の区分と必ずしも一致しないけれど、傾向としては、同じである。

以上によつて、わたしはこの地方の条里制開拓を中期古墳の時代五世紀にはじまつたとする。もちろん開拓即農地＝水田化ということではない。その熟田化のためには長い歳月を要したことであろう。

復原図（第一図）からいうと、深江村は四条四里あたりに当る。吉本昌弘氏の復原図（第二図）に見られるように、三条には三条村が、八条には岡本村の八条塚（内）がある。条を名乗る集落があるということは、その条内にそこだけにしか集落がないといふことであるから（他にも集落があればその名称では他とまぎれる）、このあたりでは集落が山寄りにあつたことを示している。もちろん古代では集落は多く山寄りにあることを通例としているが。だから深江集落ができるのは、それよりかなり時代が遡るものとみなければならない。それでは、深江村の属する四条・五条には古代集落はなかつたのであるか。これも山寄りにあって、古い伝承を持つ稻荷神社の森集落であつたと考えられる。

稻荷神社（（吉本昌弘氏著「第一図解説」））

祭神は宇迦御魂神ほか六柱。神社の縁起では、元正天皇の靈龜元年（七一五）卯月初卯の日による、この浦の海辺に集まる、一基の御奥（みふしき）に波に浮んで寄つて来た。そして、われは稻荷大明神の奇蹟（くしたま）であるが、この山辺の森にまつれば里人を幸福に守ろう、と告げられたので、現在の地へまつり、その日を吉日として毎年祭りをしたところ、五穀ゆたかに村は栄えたという。

海からあがられた場所は、寛政一〇年（一七九八）の『撰津名所圖会』によると、深江のオドリ松の木（商船大学の敷地内）であるとされている。祭日には、そこまで神幸式があつたが、明治以降は絶えている。神社の古文書は文禄年中（一五九九）

いうよりはかない。ただ近隣の例からみて、平安末期・鎌倉初期ではないかと想像してみるだけである。



（一）の火災で失われ、元禄（一六八八）以後の記録がのこっているという。

（『神戸の史跡』昭50年版）

ここにみられることがから考えると、深江は森集落、稻荷神社と深いつながりを持つ漁村から発達したものかと思われる。実測図（第一図）による等高線を見てもわかるように、ずっと古い時代には住吉川と芦屋川の扇状地（もう少し詳しくいえば、天上川系と芦屋川との）に挟まれて深入した深江の地であった。

二つの扇状地に挟まれた土地であつたから、前にあげた五つの川がここに流れ込むことになった。そしてそれらの川の多くは桑里制耕地に規制されている。その規制は桑里制耕地への灌漑のためであつたから、桑里制開拓地のうちでも灌漑に恵まれていた。だから、農作物は稔り多く、漁村としてばかりではなく、農村として発達する要素を持つていたことが考えられる。（村内には、また三王坪、泉坪といった桑里坪付の字名もある）。

それでは、律令制の郷（それは多分芦屋郷であつたと思われるが）の中から、独立した集落として深江が生まれてくるのは、いつからであろうか。

確かな文献の出現を見ないかぎり、わからないと

昭和58年4月着工9月完成予定の
史料館増築案間取図

史料館増築案間取図



友の会会員募集中

年間会費千円を前納、史料室員まで。

郵便振替・神戸三二二四〇八深江金館史料室友の会

神戸・深江

町の「民俗博物館、定着

民具提供2千点 増築も検討

地域の人の手による神戸市
議会深江本町三丁目 民俗博物館
人からの民具の提供が盛りだた
ず、増築計画も出るなど、定着
している。



地元で提供された漁具や生活用具を並べた「昔の暮らし展」=神戸市東灘区深江本町3丁目、深江会館内で

決すれば一度は来てみたい、と深江町議会が運営。展示用の会場としてついた。地元の田舎などから寄贈され、民具類が約千点。翌日には、当地には午前百点近くしたが、その後も千点くらいの提供があり約千点。翌日には、漁船が被災してしまったが、それ以後も千点くらいの提供があった。地元の想以上に提供も多く、史教室が手伝うつたので、増築を検討しているものはないといわれたが、見る生活用具古い写真などが集まつた。開館は土、年の年輪があり、勉強になります。ただ、子供たちの入館者が多いため、夏休み中は、午後五時で閉館。いふべきは「子どもたちは、自分たちの活動をしのんでもらう」といった声が出、夢は広がつて、開館は土、日曜の午前十時一

午後五時で閉館。

（毎日大西長岡崎子）



増築計画と今後の運営

旧本庄・深江の村誌編集を計画した財産区の時ひにかけに対し、深江の住民はじめ多くの市民から数多くの生活文化財が寄贈されました。それらが街のかどりの歴史や祖先の生活の歩みを知らせてくれる貴重な歴史資料であることを理解した財産区では、昭和五十六年にこれらの資料の保存・展示施設として、公民館である深江会館の北に別館として「生活文化史料室」を開設しました。

観光地でもない深江で手持ちの資料でこのような施設を作ったものの、関係者一同はその専門性に不満を抱いて出発しました。つまり、来館者が続くな

どうか、また展示に耐える質量の資料が取集てあるかどうか――。

好評でした。地方の時代が叫ばれ、歴史教育の分野で最も地域社会の歴史と文化の学習の必要性が確認されつてある昨今、わが街のわれわれの祖先の歴史を知りたいという市民の反響は大きく、この一年間で一千五百名、ほぼ月平均百名の見学者が、土・日曜の公開日に展示室を訪ねられました。当初千点であつた資料も、その後のご寄贈が続き一千点と倍増。側面から史料室を支えようという友の会も、現在では

当局や政治家自身の能力で、史料室のナオミに歸るぞ
りました。

で、深江が後世に遺すに足る文化施設にしようといふ認識のもとに、鉄筋三階建てで床面積は現在の六倍強に。一階には「昔の生活室」で百年前の深江の展示を行い、研究室と資料収蔵庫を設けます。二階は「通史展示室」と「民具展示室」これが今の展示室に加えて、開設以来二度後して下さった神戸商船大学との提携で「神戸商船大学海事資料展示室」を設置します。そして三階には、開設のきっかけとなった大量の民具の一括寄贈をして下さった深山健一家からの大資料を中心にして「医事史料展示室」を設け、「講義室・特別企画展示室」を作ります。この部屋は、歴史教室や講演会のほか、絵や写真をたしなんで見る地域住民の方々に、ミニ個展の場として提供したいと考えています。

完成すれば、市民から親しまれる街かどの歴史博物館であるとともに、全国的にも高く評価されてい る商船大学の資料や幕末の種痘史料など希有の医事

史料館が、当施設の価値を一層高めてくれるでしょう。ミニ個展がますます、地域文化のセンターとして、本館の存在意義を高めてくれるでしょう。

第三年度は、このような大發展の年です。いよいよ二度目、二度目をお願い致します。

目と足で学ぶ

博士論文発表する

兵庫の
萌

三
日
本
國
立
大
學
院
圖
書
館
藏
書
目
錄
卷
之
二
一
九
四
八
年
九
月
三
日
印
行

二百三十名の大所帯で活発に見学会や講演会を開いた。

